

Alexander von Humboldt にとってのベルリンとパリ 生まれた故郷と科学する故郷の比較

Berlin and Paris for Alexander von Humboldt
Born Home and Scientific Home

佐々木 博
(Sasaki Hiroshi)

Abstract :

Alexander von Humboldt remained in Paris for more than 20 years since coming back in 1804 from the research in South America (1799-1804). This article dealt with the reasons why he preferred Paris to Berlin, his native home town.

He saw Paris at the age of 21, one year after French Revolution in 1789 and was inspired with the spirit of Libert ,  galit  and Fraternit . The population of Paris around 1800 amounts to 510,000, much larger than Berlin of 200,000 population. In Paris he wrote "Voyage aux r gions  quinoxiales du Nouveau Continent" in French and he removed from Paris to Berlin in 1827, where he wrote "Kosmos" in German. In Paris and Berlin he got 5000 Taler a year as a adviser to King of Preu en and used these money to publish his big books.

キーワード : ヴィルヘルム = フォン = フンボルト、『南米旅行』、『コスモス』、フランス学士院、自然科学者会議

Key Word : Wilhelm von Humboldt, *Voyage aux regions  quinoxiales du Nouveau Continent*, *Kosmos*, Institut de France Acad mie des Sciences, Naturforscherversammlung

- I はじめ
- II パリへの憧れと滞在期間
- III ベルリンでの晩年の活躍
- IV フンボルトにとってのベルリンとパリ
- V おわり

I はじめ

20才のアレキサンダー = フンボルト Alexander von HumboldtはキャプテンCookと第2回世界周航に参加してきたGeorg Forsterと一緒に、オランダ・イギリス旅行をした帰路、1790年6月、初めてパリを訪れた。フランス革命の翌年で、若いフンボルトの受けた影響は強烈で、そ

の後パリが彼の第2の故郷となったくらいである。フランスの文学者たちはフンボルトを自国の作家に入れているが、「フンボルトは半分ドイツ人である」と言われることもある。自然科学者会議での開会演説を紹介した大森道子は「彼は35才で南米大旅行から帰った後、永年パリでフランス語による著作生活を送ったせいか、ドイツ語の方が時々あやしい気がする」とあとがきに書いている(大森 1983)。

89年8ヵ月(1769. 9. 14-1859. 6. 5)の長い生涯の中で、14回も生まれ故郷を離れてパリで生活し、アメリカ調査旅行後はほぼ23年間もパリに滞在し続けた。母(旧姓コロンColomb)はユグノーの子孫で、フランス系であるという

出自もあるが、兄Wilhelmはプロイセンの官僚として駐ローマ公使・内務省教育文化局長（事実上、ベルリン大學を創設）・駐ヴィーン大使・（踊った）ヴィーン会議次席全権・駐ロンドン大使など、国家の要職を歴任すると同時に、世界的には言語学者として知られている。

グリム兄弟に比せられる賢兄賢弟の組み合わせでありながら、なにがアレキサンダーをパリ志向に向かわせたのか、パリとベルリンの18世紀後半から19世紀前半の時代の二都の比較から、アレキサンダーへの影響・心情を考察した。

II パリへの憧れと滞在期間

1790年6月、フンボルト20才の時、イギリス旅行の後、ドーバー海峡を渡ってフランスのカレー Calais に上陸し、パリに7月6日まで約1週間滞在した。フランス革命1年後のパリの印象は強烈で、Liberté, Égalité, Fraternité と叫び、ワインを振るまい、若い娘達が笑いこける様子を、フンボルトは「この数日間は、人生で最も素晴らしく、忘れられない」と述べている。フンボルトの人生は政治的妥協を強いられることがあっても、フランス革命の理想に立脚していた。

2回目は1798年5月12日、28才の時、ザルツブルクからパリに入る。5月25日には「フランス学士院 Institut de France Académie des Sciences」で「窒素ガスと酸素ガスの結合実験」の講演を行った。10月までの5ヶ月間、地学・物理学・化学・生物学・地磁気・天文学などの測器を揃えとともに、使用法をマスターした。1798年10月15日、マルセイユ・アルジェを記入した18ヶ月通用の旅券を、パリのプロイセン大使館で作成してもらい、そのままフランス人医師で植物採集家でもある Aimé Bonpland とともに10月20日、29才の時、マルセイユに向けて出発し、2ヶ月ほど南フランスでアフリカへ渡る機会をうかがった。アフリカへは行けなかったため、スペインにはいり、そのまま新大陸へ渡り、1804年8月27日まで約6年間（5年10ヶ月）もパリを留守にした。

3度目は新大陸より帰還した1804年8月24

日、ボルドーよりパリに入ったときには、34才になっていた。3週間後にはフランス学士院で、南米研究旅行の初めての講演をし、名声はますます高くなり、サロンの英雄となっていた。翌1805年、ナポレオンは Notre Dame 寺院で皇帝に即位し、有名人となったフンボルトはナポレオンにも謁見され、「植物学をやっているのですか？ 私の妻ジョゼフィーヌもまた花に関心を持っています」。パリで理工科学校の講義を聞いていたシモン＝ボリーバル Simón Bolívar と知り合いとなり、翌1805年5月1日、フンボルトが駐ローマ公使の兄を訪ねたときに、ローマで再会し「あなたの国は開放を手に入れる資格があると思います」と間接的に独立運動支持を伝えている。1805年11月16日ローマから9年以上も留守の後、ベルリンに帰還。宮廷任務委嘱で年金2500ターラー、うち500はベルリン学士院会員としての手当を給付された。11月21日ベルリン学士院で初めての講演をする。12月まで、はしかで熱を出し、ベルリンの気候は自分には向いてないと感ずる。1806年1月、ベルリン学士院で植物の相貌についての初講演をする。1806年10月27日、ナポレオンがベルリンに進駐。

4度目のパリ行きは、フランスに対する賠償金減額交渉のためヴィルヘルム王子（国王 Friedrich Wilhelm III の弟）の随員として、1807年11月13日出発、12月8日パリ着。9月18日、王子はパリを去り、外交任務は無くなるが、アメリカでの収集資料の整理、新たなアジア調査旅行の準備、研究活動などのために、1827年4月まで20年間もパリに定住地を確保する。

『新大陸の赤道地域への旅行 *Voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent*』、通称『南米旅行』34巻は、1805年から刊行が始まり1835年まで30年を要した（図 1）。6部34巻でその内容は次の通りである。

第1部 Relation Historique（年代順旅行報告）7巻

第2部 Recueil d'observations de Zoologie（動物観察）2巻

第3部 Essai Politique sur la Nouvelle

- Espagne (新スペイン王国政治地誌) 3巻
 第4部 Recueil d'observations Astronomiques
 (天文観測) 3巻
 第5部 Essai sur la Géographie des Plantes
 (植物地理学) 1巻
 第6部 Plante Équinoxiales (熱帯植物) 18
 巻

アメリカで採集した植物は6000種にもものぼり、18世紀の当時では、種は約8000種しか分かっていなかった。Bonplandは植物採集の能力はあったが、それを整理分類する学者的な仕事には成長しなかったので、フンボルトは他の協力者を探さなければならなかった。この著作のためにフンボルトの他に、5人のドイツ人、6人のフランス人、1人のイギリス人が動員され、出版社もそれぞれ得意とする部門を受け持つ国際コンソーシアムを組む必要があった。ドイツでは、シュトゥットガルトとテュービンゲンのCotta社がほとんどを担当した。フランスの初版本は二つ折り判Folio (縦50.5cm 横34.5cm) と四つ折り判Quart (縦35cm 横24.5cm) で、1400枚の銅版画や鋼版画が、ほとんどはカラー印刷で、出版された。著者であるフンボルトの印刷出版に対する要求は高く、一流の画家・銅＝鋼版彫刻家・印刷屋を要求した。すでにできている下版画や、ときにはすでに印刷済みの2巻をボツにしたこともあった。

新大陸の旅行に40,000ターラー (資産の約半分と言われている) を費やし、残った資産を出版に充てるはずであった。フランス語版の全巻の値段は2,753ターラー、約10,000フランにもなり、大きな図書館ですら全巻揃えることは難しかった。プロイセンの大蔵大臣がフンボルトに24,000フランの助成金を出すことにしたが、後にプロイセン国内のベルリン・ブレスラウ (現ポーランド領ヴロツラフ) ・ハレ・ボンの4大学に全巻を寄贈する条件であった。コストをかけすぎて販売が非常に難しくなったことを悔やんだ。「残念ながら、残念ながら、わたくしの本は思ったよりも利用されない、高すぎるからだ。わたくしが日常利用するためにもっている全巻以外に、ベルリンにはたった2揃えしかない。一つは王立図書館に、もう一つは王の個人

図書室で、それも全巻揃っているわけではなく、王にとっても次々に出版されたものが、あまりに高価であったためである。」Friedrich Wilhelm IVになってようやく全巻が揃った。

1808年12月23日、フランス外相とロシアの大臣Graf Nikolau Petrovic Romancovと会食したとき、Romancovがチベットと北インドへのアレキサンダー＝フンボルトの探検旅行への費用負担を申し出たが、自由の度合いを考えて、自己資金でやるつもりで、申し出を断った。1809年7月 (38才) 物理学者で天文学者のアラゴFrançois Arago (1786-1853) と知り合いになり、親密度を深め、アメリカ旅行を一緒にしたBonpland、物理学者Louis Joseph Gay-Lussac (1804年8月20日気球で7016mの高さまで上った)、物理学者で数学者のSiméon-Denis Poissonとともに、おれ・おまえで呼べるような仲となった。パリでは学士院の数学部門の終身幹事をしてきたAragoの厚意で一つの部屋をあてがってもらい、夕方になるとレストランで、たいていは科学者の友達と食事をした。Aragoはピレネー山脈北東麓、ルシヨン地方のスペイン国境に接するPyrénées-Orientales県 (首都はペルピニャン) 出身の下院議員で、議会では最左翼に属し、アレクサンダーが反動的なプロイセン王の顧問であり、年金をもらっていることを聞いたとしたら、卒倒したであろうが、アレクサンダーがそれを口にするとはなかった。時々École polytechniqueやパリ天文台に住んで実験を重ねた。1808年9月9日、アレクサンダーの右手がリ्यूマチの麻痺にかかって、終生続き、筆跡が下手なのをそのせいにしていた。

1810年夏、Hardenberg 首相はアレクサンダーをベルリンへ呼び寄せようと、兄Wilhelmの後任として文部科学局長のポストを打診したが、アレクサンダーは断る。1811年10月10日、駐オーストリア大使となった兄を古典言語学者Carl Benedikt Hase (1780-1864) とともに、訪ねてパリを立ち、10月21日、ウィーン着。10月29日、兄とPreßburg (今日のスロバキアの首都ブラチスラヴァ) へ旅行。11月13日、オーストリア皇帝夫妻がアレクサンダーに面会した

いため、ヴィーンに戻る。11月末、後のバイエルン国王Maximilian二世の洗礼に立ち会い、ミュンヘン・シュトゥットガルト・ストラスブルグ経由で12月19日パリに戻る。

1812年1月7日、42才、ロシア政府から6～8年間のシベリア探険の要請を文書で受けるも、ナポレオン軍がロシアへ侵入して、実行不可能となった。「フランス学士院L'Institut de France」で「singes qui habitent l'Orénoque, le Cassiquaré」・「animaux carnassiers (肉食動物) de la Guyane」・「considérations générales sur la végétation des îles Canaries」などの講演をやり始める。1814年、兄Wilhelmとプロイセン王Friedrich Wilhelm IIIとともにロンドンへ。兄はドーバーからスイスへ行くが、アレクサンダーと王はパリへ。アレクサンダーの宮廷勤務手当3000ターラーに増額、これは今日で言う外交情報収集費にも相当するお金で、プロイセン王の個人的顧問であるとともに、フランス情勢・世界情勢を国王に報告する代償であったようである。1815年パリで後の第6代アメリカ大統領John Quincy Adams (1767-1848)と知己となり、フランス学士院と一緒に出席し、後年1822年、彼がAmerican Academy of Arts and Science in Boston 総裁に就任したとき、アレクサンダーをアカデミーのフェローに任命した。

連合軍は1814年4月1日第1回目、1815年2回目のパリ進駐をやるが、アレクサンダーはフランス側識者の要請を受けて、プロイセン司令官らに掛け合って、自然史博物館を駐屯地として接収しないように、また文化財もむやみに接収しないように要請して、成功した。兄Wilhelmも11月末まではパリに滞在した。4月14日、アレクサンダーは兄Wilhelmとともにフランス王ルイ18世に紹介され、アレクサンダーはプロイセン王Friedrich Wilhelm IIIの随員および通訳として「輝かしい地位」にいた。1815年11月、Hardenbergよりのフランス大使のポストの申し出を断る。アレクサンダーより4才年下で、南米旅行を5年2ヶ月も共にしたAimé Bonplandは、フランスへ帰還後3年経った1807年5月、アレクサンダーを訪ねてベルリンに数ヶ月滞在したことがあった。ナポレオ

ン妃ジョゼフィーヌの植物園の管理人として寵愛を受けていたが、1816年11月23日、Le Havre港から南米に移住し、最後は南米パラグアイで数年間捕虜生活を経験した後、奥地のあばら屋で自然を友として1858年5月4日、85才の生涯を閉じた。

1817年10月、47才時、兄Wilhelmがロンドン大使となったためAragoと一緒にロンドンを訪ね、グリニッチの丘でRotaionsmagnetismusを発見。翌年1818年9月19日、パリ自然史博物館動物学教授Achille Valenciennesとともに再度ロンドンを訪ね、10月8日、帰路アーヘンで、列国会議（オーストリア・プロイセン・ロシア・イギリス・フランスの5カ国同盟結成一ペンタルキー）に出席した兄Wilhelmとプロイセン国王・ロシア皇帝にも会い、11月25日パリへ帰還。プロイセン国王はフンボルトが意図しているインド旅行に毎年12,000ターラーを4～5年間提供することを確約する。1821年2月、アジア旅行を計画するも、イギリスの東インド会社がアレクサンダーに旅行同意書を発給しなかった（佐々木 2008）。

1822年9月13日、53才、ヴェローナ会議にプロイセン国王の随員として出席するためにパリを出発、翌1823年1月3日、1807年以来16年ぶりにベルリンへ帰るまで、ローマ・ヴェネチア・ミラーノ・ナポリなどイタリア諸都市を見て回る。ロンドン・アーヘンなどへの国際会議には、プロイセン国王Friedrich Wilhelms IIIは自分の権威付けのために、国際的有名人Alexander von Humboldtを随員として連れて歩いた。国際会議に呼び出される度にアレクサンダーは国王の臣下であることを意識させられたが、官費でゲータも憧れたイタリアへ旅行できる機会がまた一つ与えられたと考えるしかなかった。ヴェローナではフランスの文人であり外相シャトーブリアンFrançois-René Vicomte de Chateaubriend (1768-1848)に再会した。彼がイギリス大使になってからは会っていなかったが、その政治的立場は水と油ほど違っていた。シャトーブリアンは反革命の確信犯で、スペイン王援助のために軍隊を派遣し、今や独立国となった新大陸の旧スペイン王国領に君主制

を復活させるためにヨーロッパ列強は全力を挙げるべきで、「新世界全体が共和制をとることになれば、旧世界の君主制もまた滅びる他はない」と言うものであった。Bolivarはじめ、独立の戦士を個人的に知り、著作・書簡を通じて陰ながら新大陸の独立闘争を精神的にサポートしてきたフンボルトにとっては、全く受け入れ難く、興味のない会議であった。

ベルリンでは兄のテーゲルの城館（図 2）に寄宿し、引き留める人々の手を振り払って1823年2月10日ベルリンを立ち、9日後、2月19日、5度目のベルリンからのパリ到着となった、53才。11月1日、アメリカの作家Washington Irving（1783-1859）にパリのイギリス総領事館で会って以来、何回も会うことになる。1825年7月、植物学者K. S. Kunthとブルターニュ半島へ旅行。1825年9月、プロイセン国王Friedrich Wilhelmはお忍びでパリにやってきてアレクサンダーに案内させ、帰る際に「近いうちにベルリンへ戻るように」命じた。アレクサンダーも同意はしたものの、翌年になっても実行せずにパリに留まった。国王は立腹して「本当のプロイセン人ならば、嫌悪するはずの国に、これ以上そちが滞在するのを誰も許さないだろう」とアレクサンダーに書き送ってきた。同時に「年俵を5000ターラーに引き上げ、年間4ヶ月の休暇を与える」と伝えた（ガスカール 1989）。1825年末から1827年初めまで、割合に長い間隔で「コスモス講義」をいろいろな聴衆を相手に、Marquise de Montauban 侯爵夫人邸で開催。フランス学士院での講演、内外の要人との社交などで活躍し、世界各国、とくにアメリカ合衆国からの要人の「パリのアレクサンダー＝フンボルト詣」に就いては、すでに詳しく述べた（佐々木 2007）。

1826年9月23日、57才、Valenciennesに随伴されてパリを離れ、9日後の10月2日、ベルリンへ帰還。ルートはメッツ・フランクフルト・ギーセン・カッセル・ゲッチンゲンで、途中、博物館や図書館を訪れたほか、様々な分野の学者と面談している。たとえばギーセンでは大学の名称になっている大農芸化学者のJustus von Liebig（1803-73）に（ギーセン大学の正式名

称はJustus von Liebig Universität zu Gießen）、ゲッチンゲンでは数学者Carl Friedrich Gaußなどであった。Liebigはアレクサンダーの推薦で若干21才でギーセン大学の化学講座教授となり、近代化学を創立し、化学のさまざまな分野の基本的成果をあげた。たとえば、理論化学の拡大、農芸化学の創設、化学肥料の導入、クロロホルムとクロラルの発見などである。化学分析の新しい方法も考案している。Liebigは彼の科学的名著「*Die Organische Chemie in ihrer Anwendung auf Agriculture und Physiologie*」でAlexander von Humboldtへの献辞を述べている。

1826年10月2日テーゲルの城館に到着、56才。プロイセン王テーゲルに出向いてアレクサンダーのパリからベルリンへの移住取り決めを確認。2日後、物理学者Paul Ermanが主催して、10才年下の地理学者Carl Ritterベルリン大学教授初め、様々の学問分野の学者が集まり、アレクサンダー＝フンボルト歓迎茶会を開催した。

ところが2ヶ月後、1826年12月3日、Valenciennesとともに、再びパリへ。途中古巣Freibergの鉱山学校やヴァイマルにゲーテを訪ねたりして、18日かかって12月21日パリ到着、6度目のベルリンよりのパリ着となり、4ヶ月弱滞在した。1827年3月23日、56才、「Société de géographie」の名誉総裁に任命され、18年後の1845年5月3日、75才、では正式の総裁に選出された。1827年4月14日、パリを最終的に後にし、カレー・ドーヴァー経由でロンドンへ。プロイセン大使としてイギリス首相George Canningの招待夕食会に出席し、そこにアメリカ滞在中に財務長官であった現駐英アメリカ大使Albert Gallatinも同席した。5月5日Altona（北ヨーロッパ最初の自由港で、現在ハンブルク市の西部地区をなす）経由で5月12日ベルリンに帰る。Altonaでは天文学者Schumacher、物理学者Ørstedと会う。

1829年、8ヶ月半、18,000kmに及ぶロシアを探検（佐々木 2008）。翌年1830年、70才、9月28日、7度目のベルリンよりパリへ出発、5日後の10月3日パリ着、翌年1831年1月17日

までHôtel d'Angleterre, Rue Colombierに滞在。1827年パリからベルリンへ移住する際にプロイセン王との約束で、長期のパリ滞在の権利を確保していた。自分の科学や文化的用件を外交的要請と絡めておこなうことにした。それ故、それ以後のパリ旅行は、1830/31、1831/32、1835、1838、1841、1842/43、1845、1847/48の8回にも及び、(パリ滞在中に外国へ出て、パリに戻ったものは除いて) それまでの6回と合わせると、合計**14回**もベルリンからパリへ往復したことになる。ベルリンへ移住してから8回目にして最後のパリ行きは、77才、1847年10月4日であった。旅行ルートはハノーヴァー・ビーレフェルト・ケルン・アーヘン(ここからは鉄道で)・ブリュッセル(2時間停車)、鉄道でアーヘンからパリへ18時間、10月13日パリ着、翌1848年1月12日まで3ヶ月滞在。1月12日パリを立ち、途中ブリュッセル・ドイツDeutz(ライン川右岸のケルン市の部分)・ハノーヴァーに泊まり4日後の1月16日ベルリン着。

Ⅲ ベルリンでの晩年の活躍

Alexander von Humboldtはベルリン都心、Gendarmenmarkt広場西側にあるSchauspielhausコンサートホールから西へ延びるJäger Straße 22で、1769年9月14日に生を受けた。幼少時、3人の家庭教師(1番目と3番目は同一人物)の教育を受け、とくに啓蒙的な教育を施し、知識人のサロンへ連れて行って広い知識と社会を見せてやった最初の家庭教師Gottlob Johann Christian Kunthの影響は大きかった。都心から北西11KmのテーゲルTegelに別荘の城館(図2)があり、自然への興味と親しみはそこで養われた。18才以降はフランクフルトa.d.Oder大学・ゲッチンゲン大学・ハンブルク商科大学・フライベルク鉱山学校などで勉強したほか、ベルリンの植物園で園長Willdenowについて植物学などを学習した。わずか8カ月のフライベルク鉱山学校での学習の後、21才でプロイセン鉱山局鉱山官補となり、22才で上級鉱山官となった。官吏として国内外の鉱山を歩いて知識と研究を深めた。1796年

11月19日、27才、母Marie Elisabeth von Humboldtが55才で、乳ガンでベルリンで死去。Kunthが遺産分割を仕切って、アレキサンダーに8万5000ターラーの遺産が入ることになった。その年間利子3500ターラーは鉱山官の年収の6倍にもなり、直ちに官職を辞して、外国旅行に出る準備に入った。

5年2ヶ月にわたる新大陸の調査旅行から1804年にヨーロッパへ帰還し、パリに住んでいたアレクサンダー＝フンボルトは、1827年にプロイセン王Friedrich Wilhelmの強い要望により23年間住んだパリからベルリンへ移住した。11月3日からベルリン大学で自然地理学Physikalische Geographie(後に「Kosmos-Vorlesungen」と呼ばれた)についての61回の講義(最終回は1828年4月26日)を行った。助手として物理学者Ernst Knorr(1805-1879)が務めた。12月6日にはベルリンのSingakademie(声楽大学)(図3)で、大学で行ったのと同じテーマの公開講演の第1回目を行った。ここでの講演は16回(最終回は1828年4月27日)に及んだ。16回のテーマはそれぞれが長いので、縮小すると次のようであった。

- ① ②講演の目的：宇宙体(銀河系・星雲・星・暗黒星雲・黄道光)、われわれの惑星システムの構成物、宇宙および地球上の相対的大きさ、地球の形態
- ③ 惑星相互の比較
- ④ 地球内部の構成、地球の形成、温泉、火山
- ⑤ 地殻、山脈、岩石と化石、原始時代の動物
- ⑥ 地球の空気と水
- ⑦ 地球上の水の分布
- ⑧ 地球の気候
- ⑨ 動物の地理的分布
- ⑩ 人種、奴隷の運命付け、人間の子孫、民族とその性格：黒人・コーカサス人・モンゴール人
- ⑪ 民族の詳しい考察、モンゴール人、アメリカとアフリカの住民、エスキモー、サルと人間の類似性
- ⑫ 歴史における自然の統一性の認識
- ⑬ アラビア人の継続性
- ⑭ 電気とその物理学および化学への応用

- ⑮ 日中の星の可視性、星の数、南半球の星座、月の地形
- ⑯ 隕石の宇宙的自然 太陽の自然、太陽黒点：自然記述の歴史、芸術における自然の描写

16回にも及んだ無料公開講演会は、「王様から店員まで」ベルリン子を魔力に引き込んだ。講演というと普通は哲学的・文芸的な話しか聞かされなかった1200の聴衆に、フンボルトは宇宙論を展開した。つねに世界全体に目を向けさせながら、芸術的な言葉で、色彩豊かにして、華やかな個々の形態を呈示した。難しい問題でも、教養ある人に理解してもらう術を、フンボルトは識っていた。話の中に出てくる個々の形態は、調和の取れた一幅の絵へと結晶していった。その絵は人間の歴史との関係で説明された。この声楽大学大ホールでのフンボルトの講演会は、ドイツの教育史の上でも画期的なことで、上流階級だけではなく、あらゆる階層の人を啓発し、知識の大衆化・民主化を図ることが、フンボルトが意図したところであった。講義・講演の終了する直前の1828年3月12日、G. von Cottaと「コスモス」講義の出版契約を結ぶ。「コスモス」が現実に出版されたのは第1巻が1845年3月15日(図 4)、第2巻が1847年9月22日、第3巻が1850年12月15日、第4巻が1857年12月12日で、第1巻から13年かかっていた。第5巻の原稿の一部を亡くなった年1859年3月2日に出版社に送っていたので、フンボルトの死後1862年に出版された。「コスモス」の構想は50年前にゲーテが書こうとしていた「Physique du monde」にヒントを与えられたものであった。第5巻では、自分の時代の知識を総括的に記述し、世界・自然・人間・歴史の統一像を描きだそうとした。「自然は考えながら観察すると、多様な中にも統一があり、形態の中に様々なものが混じっており、そして混合しているものである」。

ベルリンにいと王の依頼事項とお付き合いが多くなり、著作活動にはマイナス要因となる。毎年Friedrich Wilhelm IIIがTeplitz(チェコ語でTeplice エルツ山脈南麓のチェコの温泉保養地 人口5.3万)へ保養に行くのに10回も付

き合わされたが、フンボルトは地磁気やバロメーターで観測を楽しんでいた。59才の1828年9月18日から7日間、ベルリンでドイツ自然科学者・医者協会第7回大会(Naturforscherversammlung)が開催され、スカンジナビア・イギリスなどから600人が集まり、フンボルトは代表として初日18日に声楽大学Singakademieで開会演説を行った。また晩にはSchauspielhausコンサートホールで音楽と歌唱付きの歓迎茶会を開催した。その後も1833年のシュレージエンのBreslau(今日ポーランド領ウロツワフ)や、1836年のイエナでの自然科学者会議に出席している。

翌年1829年ロシア皇帝からの依頼で、8ヶ月半、261日に及ぶ18,000kmのロシア・アルタイ探険を行い、ダイヤモンドを発見し、ウラル山中で60才の誕生日を祝っている(佐々木2008)。1830年代はベルリン科学アカデミーで、南米西岸の冷たい海流(発見者フンボルトにちなんで「フンボルト海流」と呼ばれている)についての講演など、多数の講演をこなしている。同様のことをパリでもフランス学士院で行ってきた。1831年1月26/27日、61才、パリからの帰路、ヴァイマールにゲーテを訪ねるが、これが最後の邂逅となり、ゲーテは翌年3月22日、82才で亡くなる。1833/34年冬学期、64才、大学でギリシャ古典の講義と、化学の講義と実験(ガルヴァニー電気装置)を聴講。その後2年間はギリシャ文学史講義を聴講。1835年4月8日、66才、兄Wilhelmテーゲル城館で死去(67才9ヶ月)。

1840年6月7日、70才、Friedrich Wilhelm III死去。後任にFriedrich Wilhelm IVがプロイセン王に。政治的影響は望まないものの、今まで以上に宮廷勤務を強要し、フンボルトを離さず、ポツダムのシャルロッテンホーフ城内のオリエント風の建物をあてがい、なるべくポツダムにいるように命令した。1940年8月25日、鉄道でStettin(今日ポーランド領シュチェチン)経由Königsberg(今日ロシア領カリニングラード)へ、Friedrich Wilhelm IVの戴冠式のため赴く。フンボルトの来航を祝してケーニヒスベルク大学教授連が祝賀会を催してくれ、17日間

滞在し、バルト海の「琥珀海岸Bernsteinküste」へ巡検。ダンチヒ（今日ポーランド領グダンスク）で自然科学者協会がフンボルトの71才の誕生日を祝して祝賀会を催してくれた。

1842年5月31日、72才、新しくできたFriedensklasse de Ordens Pour le mérite勲章を授与され、終身宰相となる。7月1日、シュプレー川北岸、博物館島北西500mのOranienburger StraBe Nr. 67に転居。17年間、死ぬまでここに住む。9月24日、73才、ベルリン移住後6回目のパリ訪問滞在中、フランス王ルイ＝フィリップよりGrand officier de la Légion d'honneurに叙せられ、翌1843年2月28日ベルリンへ帰国したときには、その祝賀会が盛大に宮廷で挙行された。10月17日、ロシア探検の実質的な招待者であったロシア大蔵大臣カンクリンGeorg Graf von Cancrinがフンボルトをポツダムに訪ねてきた。カンクリンは2年後パリ天文台でAragoの天文学についての優しい講義をフンボルトとともに聴いた。

1844年11月、75才、ポツダムで「コスモス」の第1版の序論を書く。翌1845年3月15日、「コスモス」第1巻印刷完了（図4）、6月に売り切れ。1845年7月24日、ボンでのベートーヴェン記念碑除幕式に出席するため35日間の旅に出る。そこには大英帝国ヴィクトリア女王も列席。アイフェル山地の火山地形マール（爆裂火口）を巡検。

1847年1月18日、78才、プロイセン最高位の黒鷲章Schwarzen Adler-Ordenに任ぜられる。

1852年12月中旬、82才、Royal Societyの最高勲章Copley-Medailleをフンボルトに代わって、駐英プロイセン大使Christian Carl Josias Freiherr von Bunsenが受け取る。1858年8月3日、88才、ベルリン大學創立者Friedrich Wilhelm IIIの年次記念祝賀会（大學大ホール）に参加。フンボルト訪問者の洪水は1859年の彼の没するまで続き、「アメリカ要人のポツダム詣で」をみると、当時新興国のアメリカの要人がヨーロッパへ行ったとき、フンボルトに会うことが最高の榮譽の証であったことが分かる（佐々木 2007）。

1858年8月10日、88才、知人の手紙でAimé Bonplandの死を知り、新聞に彼の死を広告。9月14日89才誕生日、新聞はアレクサンダー＝フンボルトが90才に近くなったことを評価し、記事に。1859年3月15日、89才、アレクサンダーは郵便受け取り数が年間1600～2000通にもなり、「自分の仕事のために、少し休暇と休養」が欲しいと、メディアに「助けの懇願」を書いている。

亡くなる26日前、1859年4月10日、89才、日本へ再度旅立つ57才のジーボルトFilipp Franz von Siebold（1796-1866）（日本ではシーボルトと呼ばれている）に激励の送別の辞（フランス語）を書いている。名文であるので、すこし長いが引用すると、「我が優れた友よ、旅行家にして先輩なる余は科学に対する情熱より発したる君が、今回の高遠なる志望を聞いて、これをいかに尊敬するかを公表せんと欲す。・・・日本およびその群島に関する大著述は、博物学のあらゆる方面にも亘れり。われらの植物園は貴兄のもたらしたる植物でもって飾られつつある。君は今その偉大なる研究を継続し、完成するために、再び同所に向かわんとす。君よ健在なれ。新たなる勤勞によく堪えて、この高尚なる事業を完成せられよ。君の健康は自然科学の進歩に対して興味を有するすべての人々のために、きわめて重要なものなればなり。以上は余が君の先輩として、また熱心に敬愛する称賛者の一人として、君に贈らんとする辞なり。1859年4月10日。ベルリンにて、アレクサンダー＝フォン＝フンボルト」（呉 1986）。シーボルトが日本へ同行した13才の長男の名前はアレクサンダー（1846-1911）で、明治政府の外務省職員として活躍した。

1859年5月6日14時30分、Oranienburger StraBe 67で89才8ヶ月21日の息を引き取る。兄Wilhelmの三女Gabriele von Bülowと兄次女の主人August von Hedemannが看取る。遺体は図書室に安置さる。5月10日、国葬となり、棺の前には4人の宮廷吏員が、その次には6頭の馬に牽かれた霊柩車、Pour le Mérite勲章保持者・国務大臣・外交使節団・学生600人・両院議員・学士院会員・芸術院会員・大學学校教職員

・官吏・市町村代表が続き、FriedrichstraßeとUnter den Lindenを通してベルリン大聖堂へ。5月11日、棺はテーゲルへ運ばれ、テーゲル城館(図 2)公園内のフンボルト家の墓所に埋葬。30年以上仕えてくれ、ロシア探険にも同行した軍人上がりの従僕Johann Seifertには11,164冊の本が遺産として残された。

Ⅳ フンボルトにとってのベルリンとパリ

ベルリンとパリは880km(ほぼ東京―広島)離れており、鉄道がなかった1800年頃は馬車で行くしかなく、フンボルトはほとんどの場合、道中に友達や図書館・博物館に寄って行ったため、6～12日かかっていた。フンボルト最後のパリからの帰り、1848年、77才、は、ケルンまで汽車が開通していたので、4日でベルリンに帰還している。馬車の場合には1日100～130km走り、汽車の場合には1日220kmのスピードであった。年降水量はベルリンの571mmに対し、パリは648mmと差はないが、1月の気温はベルリン0.8℃に対し、パリは4.0℃と温暖である。それよりは1800年頃のベルリンの人口は20万と小さな都市で、対してパリは人口54.6万の大都会で(1850年は105.3万)、世界中の新しい情報・最高の科学者・文化人らが集まっていた。

家庭教師だったクントがプロイセン王の意を汲んでベルリンへ帰るよう圧力をかけたとき、フンボルトは「ベルリンは田舎だ」と書いている。さらに「パリからベルリンへ移るといのは、この夜を去るに等しい」とか、「私は孤立して生き、外国のようになった自分の国の中で、追放者のごとく暮らしている」と書いている。兄Wilhelmも折に触れて弟がベルリンへ戻るように説得していた。身内から「裏切り者」を出したくないのと、弟のような才人が祖国で活躍せずに、一番良い部分をフランスにあてがうことは「知的脱走」とも言えるものである、と兄は説得している。プロイセン王から3,000ターラーも支給されながら、それをパリで消費し、パリ社交界の花形として振る舞ったところで、フランスはアレクサンダーになにをしてくれたというのか。南米からの植物をパリの植物

園に寄贈したり、博物標本を南米からパリに送りつけても、その反対給付はゼロではないか。せいぜいフランス学士院で自由に講演できるくらい00であろう。しかし、アレクサンダーにとってはこの精神的な自由こそが最も貴重なものであった。

ゲーテがEckermannとの対話でアレクサンダーを擁護して、1827年5月に次のように述べている。「パリのような都市を考えてみたまえ。大国の最高の頭脳がたった一箇所に寄り集まって、日々のつき合いや、議論や、競争の中に、お互い切磋琢磨している。そこには全世界各国から来た自然の産物や、芸術作品の最高のものが、日々展覧に供せられている。こういう世界都市を考えてみたまえ。」「ドイツでは、ある者はヴィーンに、ベルリンに、ケーニヒスベルク(現ロシア領カリニングラード)に、デュセルドルフに、ボンに、互いに70-150kmも隔たって住んでおり、思想の個人的な交換は非常に困難である。」ゲーテはヴァイマルに、ある者はゲッチェン・イエナに分散し、個人的な接触や交流も減多にできない状態であった。1794年、兄Wilhelmがイエナ大學史学教授シラーを志向してイエナに居を移し、フィヒテ・ゲーテ・アレクサンダーなどが会合するミニサロンが一時期あったが、大都会パリと比ぶべくもない。

フンボルトは著作をするさいに、ほとんどの場合フランス語を用い、数年経ってドイツ語に訳されたものが多い。母方の出自がフランス人であること以上に、メッテルニヒのいいなりになっている旧体制にどっぷりつかったプロイセンの政治体制・体質に反発し、「ドイツは退屈で、パリでしか気が晴れない」といい、フランスこそ「自由の地」であった。1820年代からフランスは産業革命期に入り、1855年の産業国際大博覧会がその成果を示すことになり、パリはガス灯が街路にとる最も近代都市であった。フンボルトはパリでフランス語で『南米旅行』34巻を書き、ベルリンでドイツ語で『コスモス』5巻を書いた。

国王個人からはフンボルトは高く評価され、信頼されていたが、ベルリン宮廷内ではその名

声ゆえもあり、歓迎されない存在であった。ビスマルクを頂点とする反動的高官と王側近からは「革命家の廷臣」と侮蔑的に呼ばれ、明らかな敵意を示す態度に遭遇することもしばしばであった。知性の味を知った者にとってベルリンは、フンボルトの言葉を借りれば「無人の荒野」と化していた。自由に話せるのはユダヤ人社会の人々だけであった。「オペラ座とHenriette夫人を見ざる者は、ベルリンでなにを見たのやら」と言われたほどの、往年の才女Henriette Herz夫人は、医師の夫が亡くなり、未亡人として簡素な生活を強いられ、サロンは閉じられていた(佐々木 2007)。

78才を最後にパリへ行かなくなったのは、体力の衰えもあるが、無二の親友であったChateaubriand・Gay-Lussac・画家François Gérard、パリ天文台で昼夜一緒に生活し研究したAragoなどが亡くなり、自分と過去を共有できる、心おきなく話せる友がいなくなったことにもよる。

本国プロイセンならびにフランス・イギリスなど20カ国からは最高の勲章を授かり、150もの学会の名誉会員であり、多くの大学からは名誉学位を授与され、連日來客制限をしなければならぬほど、來訪者が絶えず、社交儀礼で出かけることも多かったが、過去を共有できる人がいなくなってきたことは、すでに自分も過去の人になりつつあった。Alexander von Humboldtの名の付いた學術財団・大学・ギムナージウム・空港・海流・山脈・山・地名・郡名(アメリカ3箇所)・調査船・動物(17種)・植物(15種)・特急列車・切手などは全世界に広がっているが、いずれも後生の人が付けてもので、本人は知らない。新大陸、とくに中南米でのフンボルトの偉業と名声は、本国ドイツでよりも高い。

フンボルト生誕100年祭(1869年9月16日)は、*The New York Times*の見出し: *Monuments to Science and Genius — the Humboldt Celebration*、の特集記事で始まり、ボストン・ワシントン・ボルチモア・サンフランシスコ・シラキュース(1万5000人が参加)・バッファロー(実行委員長は前大統領フィルモア)・シカゴ・メンフィ

ス・オールバニなど全米各地で祝われた。まさに栄光に満ちた人生であった(佐々木 2007)。64才を過ぎてなお、ベルリン大学でギリシャ古典とギリシャ文学史の講義を聴講する好奇心と前向きな態度こそは、栄光を裏付けるものであったであろう。

1826年12月11-13日、フンボルトがヴァイマルを訪れたときのゲーテの言葉で閉めくろう。「私は彼をもう久しく知っているが、今また新たに驚嘆させられる。知識や、見聞において彼にかなう者はいない。これまで出会ったことのない多面性! 彼のどこを触れても、どこにいても、精神的宝物を我々に注いでくれる。彼は管の沢山付いた噴水のようなものであって、どこにでもただ容器を置きさえすれば、絶えず活気づけ、尽きることのない水を流してくれる。彼は二三日同地に滞在するが、私にはそれが数年にも値するように思われる。」(大森 1971)

V おわり

Alexander von Humboldtがベルリンよりもパリを好んだのは、次の5点に要約できる。

- ① 21才で体験感得した大都市パリのもつ開放感と、圧倒的な情報量と優れた研究者の人材。
- ② 調査旅行した新大陸への絶対距離と精神距離の近さ。新大陸での使用言語がスペイン語で、同行者Aimé Bonplandもフランス人であった。
- ③ プロイセンのもつ暗く重苦しい国の体制と体質への違和感・嫌悪感。
- ④ 西方フランスへの憧れの伝統。Friedrich大王がSchloß Sanssouciをポツダムの宮殿公園(世界遺産)内に建造し、ヴォルテールを1750~53年に招待するほどのフランス文化への憧れの土壌。
- ⑤ 母親がフランス系であることの出自。

大森道子が「19年間一度も帰国しなかったフンボルトのドイツ嫌いもさることながら、侍従の資格で年金を与え続けたプロイセン国王の鷹揚さも見上げたものである」(大森 1982)も、④のフランスへの憧れの風土・土

壤からと理解できる。

使用文献

<http://gaebler.info/ahnen/paul/hohanes-humboldt.htm> 2008/07/08

佐々木 博 (2009) : Nueva Españaの歴史の証人としてのAlexander von Humboldt. 目白大学人文学研究, 5, 1-24

佐々木 博 (2008) : Alexander von Humboldtのロシア探検. 目白大学人文学研究, 4, 75-95

佐々木 博 (2007) : Alexander von Humboldtのアメリカの大學に与えた影響. 目白大学・言語学研究, 395-421

Kurt-R. Biermann (u.a.) (2007) : Alexander von Humboldt Chronologie. Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, <http://www.bbaw.de>

ピエール＝ガスカール・沖田吉穂訳 (1989) : 『探検博物学者 フンボルト』. 白水社, 244頁

西川 治 (1988) : 『地球時代の地理思想』. 古今書院, 202頁

大森道子 (1983) : 『Alexander von Humboldt Rede bei der Eröffnung der Versammlung Deutscher Naturforscher und Ärzte in Berlin am 18. September 1828』. 同学社, 20頁

Kurt Schleucher (1988) : 『Alexander von Humboldt』. Preußische Köpfe. Stapp Verlag Berlin, 167頁

手塚 章 (1997) : 『続・地理学の古典 フンボルトの世界』. 古今書院, 378頁

手塚 章 (1991) : 『地理学の古典』. 古今書院, 422頁

佐々木 博・田村百代訳 (1986) : Hanno Beck 「Alexander von Humboldt研究史」および「Alexander von Humboldtの談話」. 人文地理学研究, X, 189-224

大森道子 (1982) : アレクサンダー・フォン・フンボルト. 「ゲーテ年間」, 24, 177-193

亀山健吉 (1978) : 『フンボルト 文人・政治家・言語学者』. 中央公論社, 中公新書, 270頁

大森道子 (1971) : アレクサンダー・フォン・フンボルトとゲーテ. 立正大学教養部「紀要」, 4, 63-87

エッカーマン・山下 肇訳 (1971) : 『ゲーテとの対話 (Goethes Gespräche mit Eckermann) 上・中・下』. 岩波書店

Adolf Meyer-Abich (1967) : 『Alexander von Humboldt』. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, 189頁

呉 秀三 (1896) : 『シーボルト先生：其生涯及功業』. 吐鳳堂書店, 492頁

VOYAGE

AUX RÉGIONS ÉQUINOXIALES

DU NOUVEAU CONTINENT,

FAIT EN 1799, 1800, 1801, 1802, 1803 ET 1804,

PAR AL. DE HUMBOLDT ET A. BONPLAND;

RÉDIGÉ

PAR ALEXANDRE DE HUMBOLDT.

AVEC DEUX ATLAS,

QUI RENFERMENT, L'UN LES VUES DES CORDILLÈRES ET LES MONUMENS DES PEUPLES INDIGÈNES
DE L'AMÉRIQUE, ET L'AUTRE DES CARTES GÉOGRAPHIQUES ET PHYSIQUES.

~~~~~  
TOME PREMIER.  
~~~~~

A PARIS,

CHEZ F. SCHOELL, RUE DES FOSSÉS-MONTMARTRE, N.º 14.

~~~~~  
1814.

図1 『新大陸の赤道地域への旅行』表紙  
(Theatrum Orbis Terrarum社, Amsterdam-1973-New York)

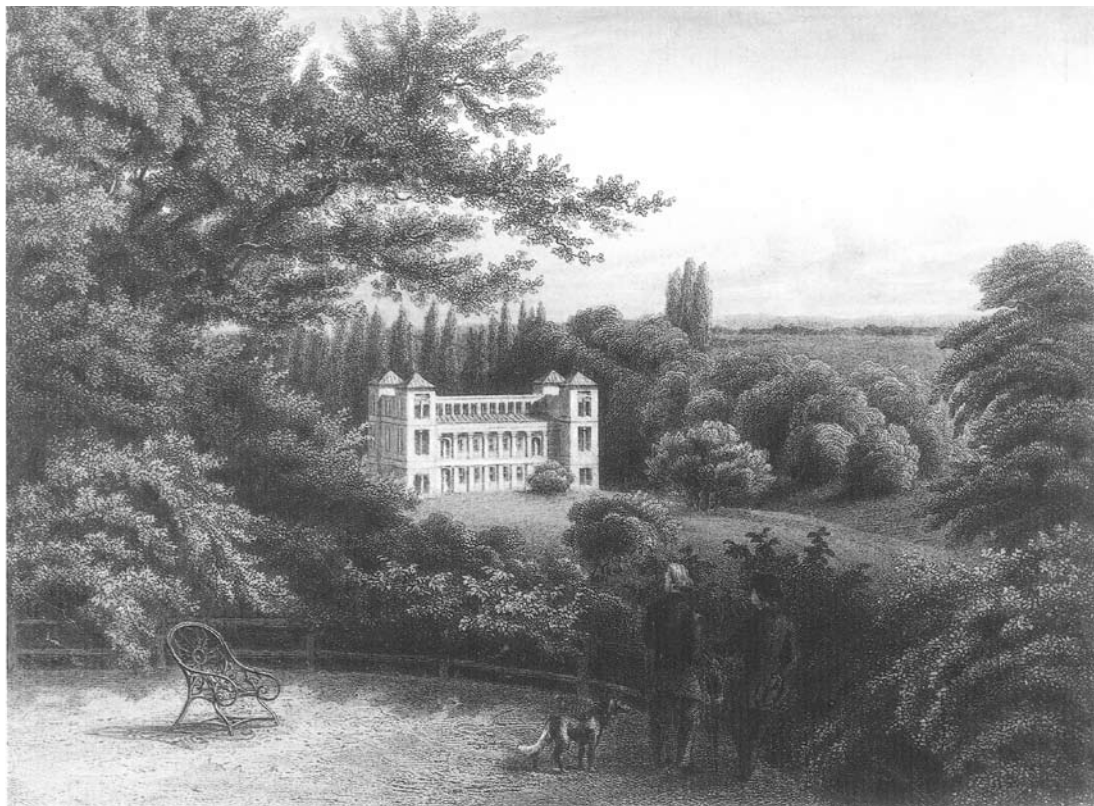


図2 1835年のフンボルト家別荘Schloß Tegel銅板印画  
(Bildarchiv Preußischer Kulturbesitz, Berlin)

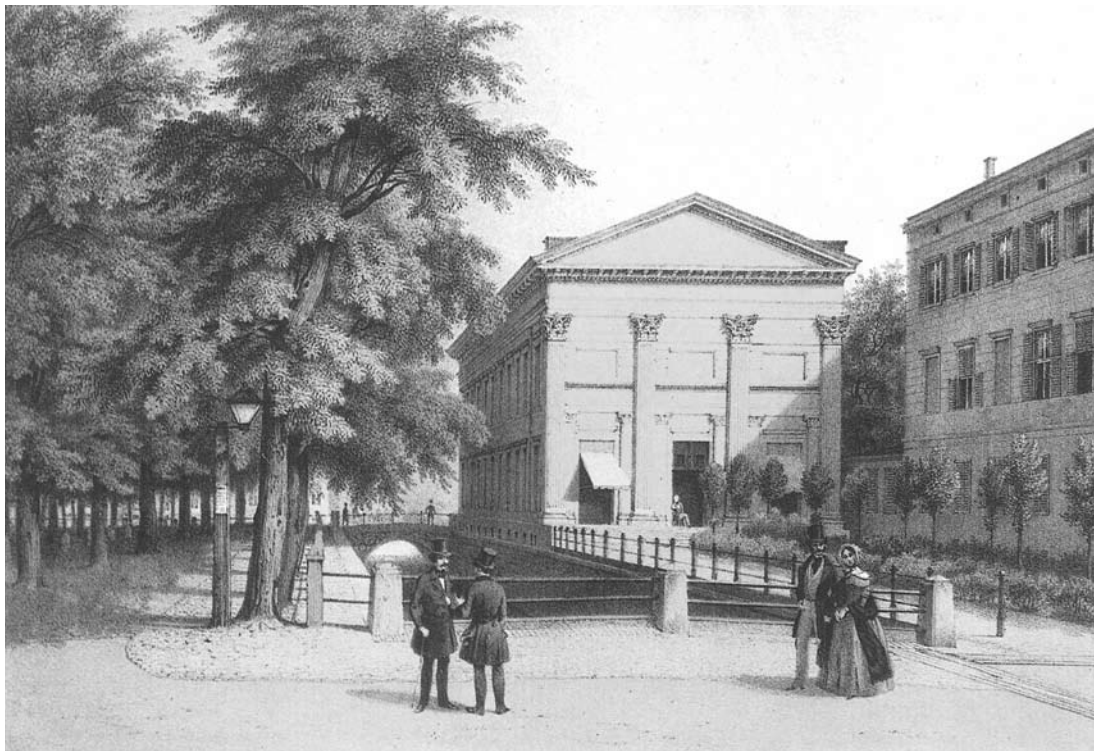


図3 ベルリンのSingakademie 1842年  
(Archiv für Kunst und Geschichte, Berlin)

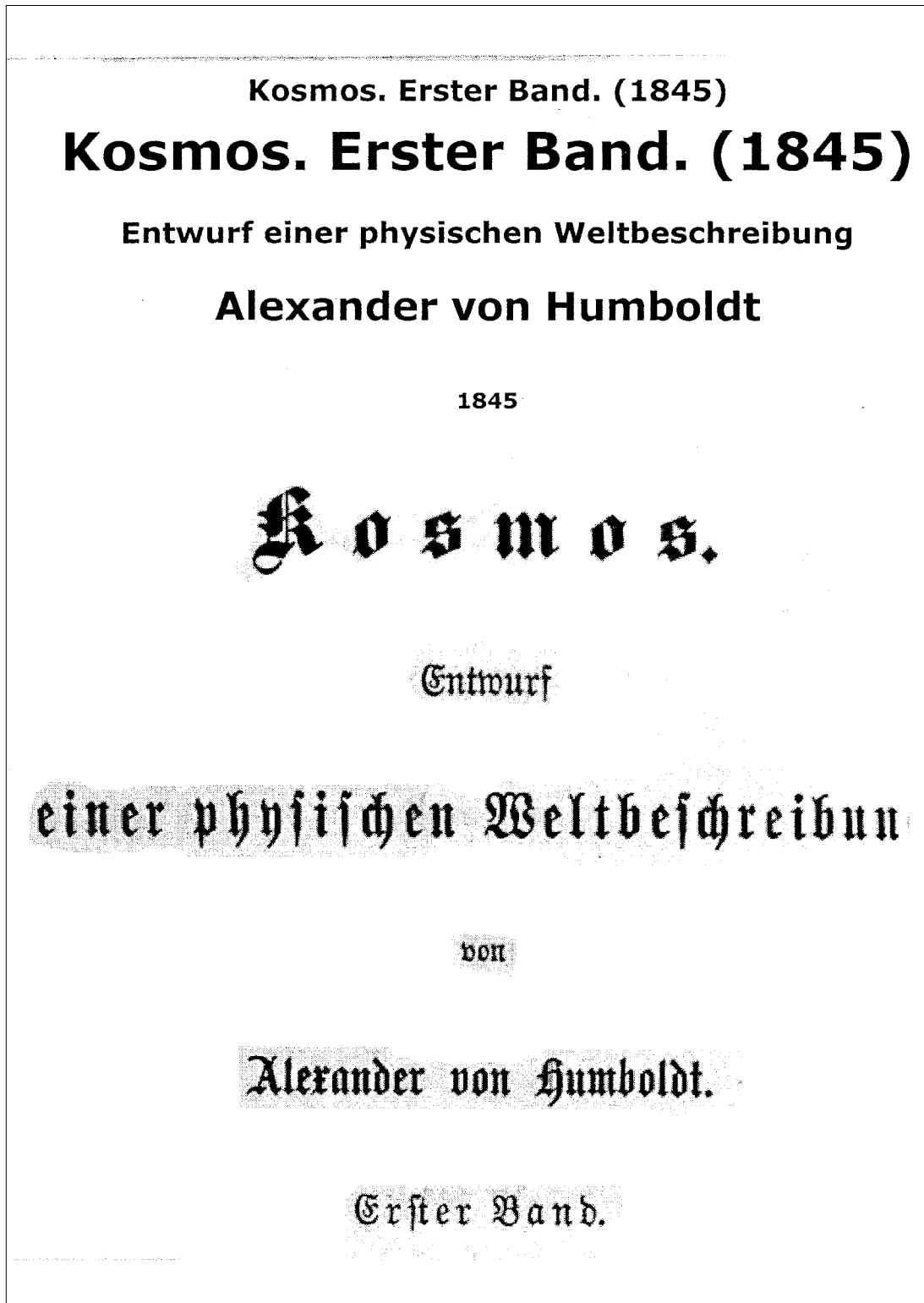


図4 『コスモス』初版表紙  
(Gallica Scans)

